

---

# 質的研究のための KJ 法の科学性に関する研究 I

—— 結論構造の信憑性を中心に ——

青 木 秀 雄

---

## アブストラクト

質的研究の科学性については様々な視点から研究が進められてきた。さらに、構造主義科学論と哲学的構造構成論に基づく構造構成主義は、現象の構造化と構造化に至る軌跡の開示によって広義の科学性を担保できるとし、ハードサイエンスとソフトサイエンスをカバーするメタ理論として定着しつつある。この広義の科学性とは、予測可能性、制御可能性、再現可能性、反証可能性、転用可能性、一般化可能性を指す。<sup>1</sup>

質的研究は、その場に生きる人々にとっての事象や行為の意味を把握し、そのローカルな状況の意味を具体的に解釈し構成していく (meaning-making) ことを目指す。当事者の視点で、場の自然な理解と一人ひとりの声の差異、及び類似性の記述が重視される。また、観察やインタビューにより、時間や歴史性、空間的な文脈の具体性、固有で特殊な中での意味の解釈に重きをおく。したがって、「あちら側にいること」が重要であって、研究という「こちら側」から「あちら側」の世界に浸り、また「こちら側」にしながら、あたかも「あちら側」にいるかのように記述することが求められる。<sup>2</sup>

KJ法は、個性把握的・定性的・総合的の三者が有機的に結びついたもう一つの道として示された。この道と、すでに確立した法則追求的・定量的・分析的という道とが、あたかも車の両輪のように揃ったとき、初めて健全な科学の道になると訴えてきた。<sup>3</sup>

小論においては、この構造構成主義に則り、グループKJ法で作成された複数の図解を解析し、その結論部「相関関係の配置図」構造に関する仮説を立て、それらの構造の近似性から信憑性を考察することにより、質的研究法としてのKJ法の科学性の一端を論証した。

## キーワード

科学性 KJ法 質的研究 構造構成主義

## I 問題・目的：

質的アプローチの全体像を得るのは容易ではないが、その背景として、現象学、解釈学、社会的構成主義、認知心理学、ポスト・モダニズム等の多様な現代思想があげられる。その手法としては、解釈的調査法、現象学的手法、参与観察法、帰納的調査法、ケース・スタディ、エスノグラフィー、エスノメソドロジー、グラウンテッド・セオリー等がある。<sup>4</sup>

KJ法は、質的研究のために生み出されたわけではないが、川喜田二郎が『発想法』(1967)において、野外科学の方法論として発表して以来、主に質的研究法として発展してきた。ところが必ずしも、それが当初から目指した科学性の周知に至ってはいない。近年、質的研究における科学性の研究が盛んになるにつれ、KJ法のそれも研究され始めている。<sup>5</sup>しかしながら、KJ法で作成された質的研究内容の結論を対象にした比較研究により、その科学性を検証した研究は寡聞にして知らない。<sup>6</sup>

教育学において構造主義を展開したのは、1961年に学問中心教育課程を提唱したBruner, S. J.である。認知心理学の知見から諸事物を学習するために、学問のstructure(構造)を反映した教育課程を登場させ、知識を構造的に把握することの重要性を訴えた。「教科の構造」(the structure of a subject matter)を効果的に提示し、その範囲と「構造」性に着目することを強調したが、彼の教科の「構造」は、主として自然科学に基づくものであった。<sup>7</sup>

しかしながら、構造構成主義における「構造」は、存在論的に構成(生成・生起)されるものであり、またそうであるゆえに複数性が前提となる。その「構造」とは、実在としての構造や客観世界の反映としての構造(システム)ではなく、それを内包する概念である。構造構成主義は、哲学と科学という二つの営為領域を整備することにより、「哲学的構造構成主義」によって異領域の信念対立を解消し、「科学的構造構成」により科学的生産性を上昇させることを可能とした。それは科学的構造構成の機能を備えていると同時に、判断中止、還元、関心相関性といった信念対立解消のための哲学的解明機能も備えている。<sup>8</sup>

その構造主義科学論は、現象学的思考法と構造を基軸とすることにより、科学論における主客の難問を解明した構造をもち、人間科学の科学的基盤となるものである。そして構造構成主義は、関心相関的観点(目的性)が組み込まれることで、より科学的営為に直結する枠組みになったのである。「構造」とは、狭義には、つまり科学的営為に用いる場合には、構造主義科学論に倣い「同一性と同一性の関係性とそれらの総体」という存在論的な概念を指す。また広義の意味では、ロムバハの「関心相関的に立ち現われる根源的な何か」である。<sup>9</sup>

そこで、小論においては、質的研究を中心課題とした科学論全体を包含することを企図した構造構成主義理論の科学性に則り、KJ法で作成された結論構造の仮説を立て、KJ法の習得を希望する講習受講者がグループKJ法で作成した結論部「相関関係の配置図」構造を対象に、その仮説とそれらの構造との近似的妥当性を解析して、その信憑性を検証することにより、質的研究方法としてのKJ法の科学性を考察することを目的とする。

### I-1 質的研究とKJ法

質的調査法は、社会現象の自然な状態をできるだけ壊さないように、その意味を理解し説明しようとする探求の形態を包括する概念である。あらゆるタイプの質的調査法が立脚

しているキーとなる特徴は次の点である。<sup>10</sup>

- ①「我々の日常世界は、人びとがその社会的世界と相互作用し合うことによって構築されている」という哲学的考え方に基づく。ある現象を部分的要素に解体して検討する量的調査法とは対照的に、質的調査法は、すべての部分がいかに連携して一つの全体像を形成するのかを明らかにする。人びとの経験の中には意味が埋め込まれているが、これが調査者自身の知覚を通して伝えられる。重要なことは、調査者ではなく、参加者の観点から関心の対象となる現象を理解するという点である。
- ②調査者がデータ収集と分析の主たる道具である。調査者は、文脈に対して応答的であり、その場にふさわしい技法を使うことができる。全体的な文脈を考慮できる。
- ③普通はフィールドワークを伴う。調査者は、人びとの自然な状態での行動を観察するために、その場や状況、機関に実際に出向く。
- ④主として帰納的な調査の方策 (strategy) を用いる。すなわち、このタイプの調査は、現行の理論を検証するというよりは、むしろ抽象物や概念、仮説、理論をつくり上げる。そこには、調査のために理論から演繹される仮説のようなものはない。理論といった形態をとるが、これらはデータから帰納的に引き出されたものである。
- ⑤プロセスや意味や理解に焦点をおいているので、質的研究の成果は、厚い記述 (richly descriptive) になる。文脈や登場人物、また関心の対象となった活動が、調査者により記述される。さらにまた、調査参加者 (participants) 自身の生の声、文献からの直接的引用、ビデオからの抜粋という形のデータも、調査結果を補助するためによく組み込まれる。
- ⑥加えて、あらゆるタイプの質的調査法に共通ではないが、質的研究のデザインは、創出的 (emergent) で柔軟であり、進展中の研究の状況に対して応答的であるべきである。

以上のような質的調査法の特徴に対し、KJ法は次のように親和性が強い。

定性的データは、KJ法の手続きの中で、有機的な親和力を発揮して、全体へと生成発展してゆく、と川喜田二郎はいう。この対象化が行なわれたとき、初めてそのデータと対面する「自分」が発生する。このように、自他の区別というものは、何も本来的にあったものではない。必要に応じて生まれた、いわば方便のワクダ。その上で、対象が訴える内面の論理に従って、素直に一つの宇宙として生み落とす。そうすると不思議にも、「外からの眼」で視ていたはずの同じ対象が、いつの間にか対象側の「内からの眼」で捉えられていることに気づく。

このように、外からの眼と内からの眼が、KJ法の創造過程の中で、生きいきとやり取りするようになると、一般に「深い理解に到達する」。このような外と内との一体融合化は、自己と環境との一体化だといえよう。「我を忘れて」という状態のときこそ、その人が最も主体性を発揮するのだ。状況とか環境の中に完全に融けこんでいるときこそ、実は最も状況の主人公になれるときなのである。<sup>11</sup>このように、「こちら側」と「あちら側」の世界に交流し、あたかも「あちら側」にいるかのように研究する姿勢がKJ法にも求められてきた。

KJ法による質的研究 (野外科学) の主眼は、渾沌とした現場から普遍性・法則性を追求し、理論化・技術化を図るとともに、個性・独自性を把握することであるといえる。普遍性・法則性の追求と個性・独自性の把握が共存しているのが質的研究の特徴であろう。そのため必然的に、個々の事例研究を積み重ねていくことが重要となる。数多くの事例に共通に内在する論理を洞察し、理論化・技術化を図ることになる。なお、野外科学としての質的研究が実践・検証へと進むには、実験科学としての量的研究との連携が不可欠であ

る。量的研究と質的研究を単純に相反するものと捉えてしまうと、この点を見落としてしまう。逆に、量的研究の立場から大胆かつ画期的な仮説に基づく研究を行うためには、KJ法による質的研究との連携が不可欠である。<sup>12</sup>

以上から、KJ法は質的研究の特徴を満たしているといえるが、さらにその臨床の場の概念については次のように規定している。実験室的自然は、非個人的なものとして扱う暗黙の約束のもとにある。それに基づく実験科学には、普遍的法則を求めるという意味で、法則追求である。これに対し、野外的自然は個性的なものである。野外科学でも法則追求志向もあるが、その本領は個性把握的なところに存する。そこで、実験科学は仮説検証的であるのに対し、野外科学は、その仮説をどのように思いつき構成すればよいかを主眼にしている意味で、仮説発想的である。ここでいう「野外」とは、人間を含む自然であり野外であって、スラム街の研究も、企業の中の職場も野外に該当する。<sup>13</sup>実験室的ではないという意味である。だから、古文書研究の文献ですら、野外的性格を帯びた対象になる。また、顕微鏡下の世界が一つの野外ともなる。<sup>14</sup>

## I-2 構造構成主義の科学性とKJ法

川喜田二郎は、実践の重要性からKJ法を次のように説き起こした。「生きる」という問題から出発したい。それは単に生物学的に生命を維持する問題ではない。またその生命を、この世界の外に視る自分というものを置いて（「世界的」立場）、そこから知的認識の対象としてのみ扱おうとする主客分離的なものではない。「生きる」とは、何よりもまず認識というだけの狭さを乗り越えた実践の問題である。従来の世界外的な思想では、認識はそのまま実践にはつながらず、「生きる」という問題の核心には決して迫ることはできなかった。「生きる」ことには、保守と創造の両面があり、半面相対立しつつ、半面では相互に扶け合う。ここに本来的な矛盾葛藤が宿っている。創造の面が強く出るときは、行為がより行為らしくなる。つまり「行為」とは、典型的には創造的行為であり、問題解決である。<sup>15</sup>このように、KJ法の基盤と「実践」という意味が関連付けられて明示されている。

同様な世界観に立ち、構造構成主義の中核となる概念を提唱した竹田青嗣は次のように述べる。世界観や価値観が必然的に多数性をもつことを理解することは極めて重要である。この多様な世界観を相互承認することを困難にしている最大のポイントは、世界があるときは多様で、あるときは一様な姿を現わすといったように、多様性と一様性が表裏一体のものとして立ち現われていて、どちらの側面が知覚されるかは、立ち位置や観点や時間の経過とともに変化し、様々な姿を現わすことにある。そのため、動的に変容する在り様を表す「原理」が必要となる。つまり、超越した「外的視点」から境界設定や分類を行なうのではなく、その「原理」はそれを行為者が身につけた結果として、世界観や価値観が必然的に多数性と一様性という矛盾した姿を現すことを了解し得るような「内的視点」として機能するものでなくてはならない。<sup>16</sup>

そこで、構造構成主義の中核原理として「身体・欲望・関心相関性」がその「内的視点」として機能する認識装置（視点）とされた。これはニーチェの「力の思想」から根本仮説的性質を除去し、ハイデガーの理論を踏まえて定式化した「存在・意味・価値は、主体の身体・欲望・関心と相関的に規定される」という原理である。<sup>17</sup>

分析的な認識作業のみに「科学する」のイメージが狭められ固定化されてきた結果、評



価方法に関する科学が著しく立ち遅れてきた。だから、「科学は没価値的」という陳腐な固定観念の常識を打ち破り、むしろ「価値の科学」ないし「評価に関する科学」を開拓すべき時といわねばならない、と川喜田も述べている。<sup>18</sup>

一方、構造主義科学論は外部実在を前提としないことから、人間の事象の物理的側面と意味的側面の双方に境界を引くことなく、原理的に同等に扱うことが可能となった。それがもたらす帰結と、それによって基礎づけられる多元主義社会について、池田清彦は次のように述べている。「外部世界も実在しないし、唯一の正しい科学理論もありません。＜中略＞擁護すべきものは、世界中の人々の意識の中に存在している。相互に共通であったり背反したりしている多元的な心的構造の実在性だけです」。<sup>19</sup>

現象学的思考法に立脚した構造構成主義は、納得できる「構造」を記述できることが科学であるとする。他のすべての存在を疑っても、疑っている自分の存在だけは信じないわけにはいかない。自分の存在が疑えないのであれば、自分の考えている観念や、自分の経験自体の存在、すなわち「現象」も疑うことができなくなる。原理上、記号と記号の関係形式（例： $A+B \supseteq C$ ）は、誰にとっても了解可能であるという意味で、客観的なものといえる。この関係形式に、「コトバ」の形で表記される「同一性」を代入したものは通常「構造」という。たとえば、〈「水」は「酸素」と「水素」から成っている〉という命題は、 $A+B \supseteq C$  の関係形式に A「酸素」 B「水素」 C「水」を代入したもので、「構造」といえる。したがって、科学とは、構造を記述することであり、現象をより論理的に説明できる理論（構造）が、より有効な理論（構造）であるといえる。

コトバとコトバの関係形式である構造は、一回起性の現象のみでなく、複数の現象をコードする。この中には未来の現象も含まれ得るため、原理的には、構造は未来の現象に対する予測可能性も担保することになる。一回起性の現象は時と場所を同じくして再現することは不可能であるため、現象が再現可能ということは、結局、その現象に関する構造が記述できるかどうかにかかっている。すなわち、構造を記述すれば、構造がコードする現象を作り出すことは原理的には可能であるため、予測可能性も再現可能性も保証されることになる。<sup>20</sup>

### I-3 KJ法の科学性

このような構造構成主義は、現象の構造化と構造化に至る軌跡の開示によって広義の科学性を確保できるとし、予測可能性、制御可能性、再現可能性、反証可能性、転用可能性、一般化可能性を可能にした。

KJ法の科学性を担保するために、川喜田は次のように述べている。人間の生活行為に実践的に関わらなければならないことは、ことごとく個性把握的・定性的・総合的な見地を多少ともに織りこんだ意味において、科学的に処さなければならない。不幸にして現代は、場所柄や時節柄も弁えない規格版の建築、住民の声もデータにできない天降りの行政、生徒の個性も生かされない画一的教育、患者の独自の状況も無視した公式的治療の氾濫する時代なのである。すなわち、この偏った「科学的」と称する通念は、極論すれば暴力的にまかり通っている非科学的な道だ。そこで、当世流行のアプローチの仕方や視角や理論などを、真に科学的と呼べるやり方の必須の条件としてはならない。真に科学的といえるやり方は、次の最少の条件に限るのがよい。①獲得した手段・方法をガラス張りにした材料

(データ)の提示、②そのデータの加工処理方法がガラス張りであること、③結論が明示されることである。<sup>21</sup>

以上の条件を端的に示しているのが、KJ法図解である。それは正に「構造」を明示する。構造構成主義が定義する「構造」は、存在論的に構成(生成・生起)されるものであり、またそうであるゆえに複数性が前提とされる。そして「命題」や、それが検証可能な形となった「仮説」「理論」も同じ「構造」として包括される。「構造」とは、客観世界の反映としての構造(システム)ではなく、それを内包する概念である。したがって、いかなる「構造」も人間が「構成」したのであり、その意味において人間の「恣意性」が混入せざるを得ない。コトバは原理的には恣意的(社会的)なコトである。これをコトバの「恣意性」という。したがって、「コトバ(同一性)とコトバ(同一性)の関係形式」である「構造」も恣意的ということになる。その意味では、恣意性は科学的構造構成の基礎ともなる。「恣意性」とは、「コトバ」や「構造」が、人間により構成されたものである以上、原理的には恣意的・社会的な側面を含まざるを得ないことを明示化する概念である。それゆえ、これは構造構成主義の根底をなす考え方の一つである。<sup>22</sup>

KJ法のグループ編成が高次元になるほど、表札は抽象的になるのだろうか。しかし、まず「抽象的」という言葉と「観念的」という言葉を区別したい。不的確なグループ編成をしていくと、何段階かグループ編成を積み重ねるうちに、実態からどんどん浮いたものに外れていく。ついに実態把握は崩壊してしまう。この状況は「観念的」というものであって、そうではなく的確なグループ編成を積み重ねると、ますます物事の核心に喰いこんでゆく。これを未来の「抽象化」と呼びたい。この意味なら、グループ編成が積み重なるほど抽象的になると形容してもよいかもしれない。したがって、抽象度が高まるほど、ますます具体的な物事の核心に迫る力を備えるのである。<sup>23</sup>

空間配置の論理も、できあいの科学では無理である、と川喜田はいう。同じラベルのセットでも人によってさまざまな図解作品になる。それにもかかわらず、まともに仕上がった作品なら、そのどれもが関係者を強く納得させる。真理なら一義的に同じ姿になるはずだと信じこみがちな俗流科学観の持ち主に、これでよいのだとわかってもらうには、しばしば骨を折る。要するに、KJ法の科学的説明をめぐることは、現代科学はまだあまりにも無力である。<sup>24</sup>

このように彼は嘆いたが、ここによく構造構成主義によって、KJ法の科学性が証明される地平が開かれつつある。多様性と一様性が表裏一体のものとして立ち現われる世界を科学する原理が明らかにされたのである。

## II 方法：

KJ法の結論である「相関関係の配置図」構造についての下記仮説に基づき、KJ法習得希望者を対象とする演習において、グループKJ法により作成された複数の図解を構造構成主義に則って解析し、それらの構造の近似性から信憑性を考察することにより、質的研究法としてのKJ法の科学性を検証する。ついては、この目的を達成するために次の方法を採用する。

仮説：14項目の質的データに基づき、KJ法の原則に則って生成された下記結論「相関関

係の配置図」構造<sup>25</sup>と、KJ法受講者たちが同一の質的データに基づきグループKJ法によりKJ法の原則に留意しつつ作成した複数の結論構造とを比較し、近似的妥当性を認めることによりそれらの構造の信憑性を獲得する。

KJ法の原則に則って生成された結論：適切な抽象化がなされれば、<sup>26</sup>おおよそ下記3つの最終の表札（KJ法通称：島A—島B—島C）の相互関係に統合され、「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルの構造は下記のようなろう。

島A最終の表札：いつの間にかコマーシャルに洗脳されて主体的判断ができなかったり、報道や情報被害を受けたりされやすい社会状況なので、メディアリテラシーを身につけ、適切に情報活用ができるようにしたい。

島B最終の表札：相手が見えないネット上でのいじめが増加しているが、流れてしまった情報は消せないで、傷つく人がいないか、個人情報の発信に気をつけよう。

島C最終の表札：インターネットの普及とテレビの双方向化は、適切なキーワード入力できれば、いつでもどこでも様々な情報を手に入れられる。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	主体的なメディアリテラシー体得の重要性	3, 4, 5, 6, 7, 14
B	相手不詳の情報社会での個人情報管理の必要性	10, 11, 12, 13
C	ICT機能の特徴（ユビキタス・双方向通信）	1, 2, 8, 9

備考：情報化社会の負の側面に関するデータや、なぜメディアリテラシーの体得が必要ななどのグループ編成によっては、島Aと島Bの最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルの揺らぎ、すなわち「コマーシャルに流される」「インターネットの悪用」に関するものが島Aもしくは島Bに包含されたりするのは許容範囲であると考えてる。

#### 対象者：

2015年度明星大学免許更新受講者全員 48人（男28人・女20人、30歳代26人・40歳代12人・50歳代10人、小学校教員30人・中学校教員5人・高校教員9人・中高一貫校教員1人・特別支援学校教員1人・教員勤務経験者1人・教員採用内定者1人）

2016年度明星大学免許更新講習者全員 42人（男18人・女24人、30歳代22人・40歳代11人・50歳代9人、小学校教員28人・中学校教員5人・高校教員4人・特別支援学校教員2人・幼稚園教員1人・保育士1人・教員勤務経験者1人）

実施期間：2015年度 7月29日 9：30～17：10

2016年度 8月2日 9：30～17：10

## Ⅱ-1 手続き

事前アンケートに回答した後、名簿順に6人ずつのグループをつくり、予め用意した14項目の質的データをグループ毎にKJ法で統合し、図解を作成した後にプレゼンテーションし、「衆目評価」を実施する。最後に、事後アンケートに回答する。

## Ⅱ-2 手順

### Ⅱ-2-1 事前アンケート

- ① KJ法を知っていましたか？（番号を○で囲んでください。）

回答 1知らなかった 2名前だけは知っていた 3知っていた

- ② ①で、3知っていたと回答した人にききます。

KJ法はどのようなものだと思っていましたか？

回答 1マインドマップのようなものと思っていた 2その他

- ③ ②で、2その他と回答した人にききます。

KJ法を行う要点につき、知っていたことを記してください。

### Ⅱ-2-2 班編成

2015年度 1班6人（男4人・女2人）、2班6人（男4人・女2人）、3班6人（男6人）、4班6人（男3人・女3人）、5班6人（男2人・女4人）、6班6人（男3人・女3人）、7班6人（男3人・女3人）、8班6人（男3人・女3人）

2016年度 1班6人（男4人・女2人）、2班6人（男1人・女5人）、3班6人（男1人・女5人）、4班6人（男3人・女3人）、5班6人（男5人・女1人）、6班6人（男3人・女3人）、7班6人（男2人・女4人）

### Ⅱ-2-3 14項目の質的データ

6人程度の班に分け、各グループに下記14項目の質的データ（『新しい社会5年下』小単元課題「わたしたちは、どのようにすれば情報をじょうずに生かすことができるでしょうか」に関わるセンテンスを抜粋した要点文）<sup>27</sup>を示した。

- No. 1 テレビのコマーシャルから、新しい製品の情報などを知ることができます。
- No. 2 マスメディアのテレビとインターネットをつなぎ、双方向に発信ができるようになっていきます。
- No. 3 情報によって情報被害を受けたり社会が混乱したりすることがあります。
- No. 4 情報を利用するときには、その情報の発信元や内容を見分け、わたしたち自身も冷静に判断することが大切です。
- No. 5 テレビのコマーシャルを見ていると、商品の名前を覚えることがある。
- No. 6 お店で買うとき、コマーシャルで知っている品物を選ぶことがある。
- No. 7 広告を見て、とても安く売っているものを買に行ったのに、かえって高い買物をしてしまった。
- No. 8 携帯電話がふきゅうしたので、いつでもどこでも会話をしたり、ウェブサイトを見て情報を調べたりできる。



- No. 9 インターネットで調べ学習をするときは、どのような言葉を入力するかが大切です。
- No.10 インターネットを使ったいじめが増えて問題になっている。
- No.11 インターネットの特ちょうとして、相手が見えなくても交流できることがある。
- No.12 一度インターネットを通して流れてしまった情報は、止めることができない。
- No.13 情報を発信するときは、その流した情報によって、きずつく人がいないようによく考える。
- No.14 必要な情報を自分で選び出し、活用できるように、メディアリテラシーを身につける必要がある。

#### Ⅱ-2-4 事後アンケート

KJ法の演習を終了してのご意見・感想を書いてください。

#### Ⅱ-2-5 KJ法（グループKJ法）の具体的手順

グループKJ法は、KJ法を少人数グループ（6人程度）で行う場合の名称である。それを個人ではなく、グループで協働するというのみの違いである。

KJ法は、定性的データを処理し判断するにあたり、「渾沌をして語らしめて秩序を生む」方法を採用する。データ群それ自体の語りかけに素直に従ってデータを統合し構成する。認識（広く判断、そして執行をも含める）における法則追求のアプローチと個性把握的アプローチを同等に、科学的なアプローチとし、その両者の相補う行使の中にベターな認識の道があるとする。<sup>28</sup>

KJ法は、すぐれて問題解決のための方略を提供する。問題解決全体のプロセスには、①問題提起→②状況把握→③本質追求→④構想計画→⑤具体策→⑥手順化という6ラウンド（W図解）が設けられている。それぞれのラウンドで異なる点は、対象となる情報の質と問題解決に望む態度が異なる。つまり、①問題提起のラウンドでは、取り扱うテーマの問題となるような混沌とした情報群を対象とし、問題は何なのかという態度でKJ法1ラウンドの過程に臨む。これに対して、たとえば②状況把握ラウンドでは、現実における状況（事実情報）を対象にし、どうなっているかという態度でKJ法を用いる。したがって、6ラウンド累積KJ法各々のやり方は基本的に同じである。<sup>29</sup>

KJ法1ラウンドのプロセスは、①情報収集→②「元ラベルづくり」— 集めた情報をラベルに整理・記録する→③「グループ編成」— KJ法のやりかたで情報群（元ラベルと上位カテゴリー）を累積的にabstraction（抽象）する→④「KJ法図解化」— abstractionしたカテゴリー群の最終段階、すなわち結論の「相関関係の配置図」を構想した上で、模造紙上に表札の各段階を上から順序良く空間配置して図解化する→⑤「叙述化」— そのKJ法図解を口頭、文章で表現する、という順序で進行する。

このプロセスのなかで、一番複雑でしかもKJ法の真価を発揮するのが③「グループ編成」である。「グループ編成」のプロセスは、まずa「ラベル上げ」— 情報群を構成している各「元ラベル」を整理と並べる→b「ラベル集め」— KJ法の統合方法によって「元ラベル」をグループ化する→c「表札づくり」— グループ化した元ラベルをKJ法の方法により、いわば要約して上位カテゴリーに統合する。<sup>30</sup>

ついで2回、3回……情報統合の最終まで、同様にa「ラベル拡げ」→b「ラベル集め」→c「表札づくり」のプロセスをたどるが、2回目以降の「グループ編成」には、取材した生の情報源としての「元ラベル」をabstractionした「表札」が「元ラベル」群に加わる。次第に、「元ラベル」が統合されることによって、「表札」に置き換わっていく。ただし、最後までどの「表札」にも統合されずに、自己を主張して残る「元ラベル」もある。

②「元ラベルづくり」は、具体的な情報をラベルに整理・記録する作業であるが、その要点は情報の内容を1枚1項目とし、全体として訴えかける一つの中心性、すなわちその情報の「志」をワンセンテンスで、明確に記すことにある。

### ③「グループ編成」

a「ラベル拡げ」とは、各「元ラベル」をランダムに整然と並べることである。その情報内容を空間的に認知・記憶できるように、整然と並べて一度置いたらむやみに動かさない。2回目以降の「ラベル拡げ」には、「元ラベル」と「表札」が混在することになる。

b「ラベル集め」は、KJ法独特の方法で「志」—上位概念によりカテゴリー化することから誤解が多い。独創的な技法なので、自己流になりやすい。

### c 表札づくり

「表札づくり」は、「ラベル集め」でグループ化された「元ラベル」や「表札」を抽象する作業である。今日では一般に「核融合」と呼ばれる方法により情報の抽象化を行う。「核融合」で情報を統合する際に、本来の抽象化ではなく観念化がなされてしまうと、現実の情報に即した本質的洞察へと至らない。

### ④KJ法図解化

各最終カテゴリー（「島」という）の「表札」に基づき「相互関係の配置図」を構想する。これがKJ法の結論構造である。次いで、模造紙上にそれらの表札の束を順次開いていく。元ラベルまでひらいたら、「青枠のエーワンラベル」を貼りそれらの表札として「赤枠のエーワンラベル」を貼り付ける。次いで各表札の下に島どりをしてから、三段目以降の表札は、島どりをした模造紙の外側に直接転記する。各カテゴリーの「表札」が示している結論の関連性を、あくまでも論理的に説明できる関係線を入れる。関係線は、原因⇒結果、仮定⇒結論、相互⇔相互関係、対立関係>—<対立関係など様々に工夫する。

最終段階の「表札」はどうしても長くて、理屈っぽい。そこで、その最終「表札」の「志」を表わした「一行見出し」を挿入する。また、最終の「志」同志が訴えている、情念的なものを表現するためにさまざまな「シンボルマーク」や絵図を入れ、またそれをサブタイトルとして示す。<sup>31</sup>

## Ⅲ 結果：

上記研究目的と方法に沿って実施した結果、次の結果を得た。

### Ⅲ-1 事前アンケート結果

対象者全員が、下記のようにKJ法を学習した経験がない。

#### ① KJ法を知っていましたか？

回答 1知らなかった

32人

- 2名前だけは知っていた 31人  
 3知っていた 27人
- ② KJ法はどのようなものだと思っていましたか？  
 回答 1 マインドマップのようなものと思っていた 27人  
 2 その他 0
- ③ KJ法を行う要点につき、知っていたことを下記してください。 0

### Ⅲ-2 作成されたKJ法図解の結論部とその構造解析結果

上記方法に基づき14データをグループKJ法でまとめ、2015年に8シート、2016年に7シートのKJ法図解が作成された。<sup>32</sup>

その結論部（最終の表札、「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル）とその構造解析の結果は下記の通りである。

#### 2015年度1班

島A最終の表札：テレビ、インターネット、携帯電話を使い、情報を受信・発信する際は、流した情報により、きずつく人がいないようにすることや、情報リテラシーを身につけることが必要である。

島B最終の表札：コマーシャルは、商品の名前を覚えさせ、買い物をする時、品物を選ばせることができるが、総じて商法には情報被害や社会混乱、いじめなどの問題点もある。

島C最終の表札：インターネットは多くの情報であふれ、言葉を選んで調べなければならなかったり、相手が見えない、流した情報は止められないといったことを注意しなければいけないという特徴がある。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	情報リテラシー習得の必要性(情報の上手な活用)	1, 2, 4, 8, 13, 14
B	情報社会の様々な問題点	3, 5, 6, 7, 10
C	情報(インターネット機能)の特徴	9, 11, 12

1班の分析結果の評価：情報化社会の負の側面に関するデータのグループ編成が少々入り乱れた結果、島Aと島Bの最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルが揺らいでまとまりに欠けるが、許容範囲であり、全体的に仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっている。

#### 2015年度2班

島A最終の表札：コマーシャルなどからの情報が全て正しいとは限らないので、情報を正しく判断できるためのメディアリテラシーを身につける必要がある。

島B最終の表札：一度インターネットを通して流れてしまった情報は止めることができないため、流した情報によって傷つくいじめが増えており問題になっている。

島C最終の表札：現在のメディアの利便性は、どこでもいつでも双方向性がある。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシー習得の必要性	1, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 14
B	情報は一度流れてしまうと消せない	10, 12, 13
C	メディアの利便性 いつでもどこでも双方向性	2, 8, 11

2班の分析結果の評価：表面的な分類に少々墮した感があり、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルの抽象化の達成度が全体的に低い。しかしながら、仮説としてのKJ法原則からそう遠くない結論になっている。

### 2015年度3班

島A最終の表札：私たちは情報を発信するときも受け取る時も、発信元や内容を冷静に判断し、メディアリテラシーを身につけて活用すべきである。

島B最終の表札：情報は発信内容により、いじめや情報拡散等の情報被害を受けたり、支えたりする場合があるので、情報はその情報によって傷つく人がいないように相手の立場を考えて使う必要がある。

島C最終の表札：情報社会では、テレビ、インターネット、携帯電話によって、いつでも、どこでも知りたい情報を得ることができるし、一方的に情報が入ってくることもある。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	規範意識(メディアリテラシー)の習得と活用	4, 9, 14
B	凶器になる(情報化社会の問題点)	3, 7, 10, 11, 12, 13
C	双方習得・一方取得(ICT機能の特徴)	1, 2, 5, 6, 8

3班の分析結果の評価：島Bに情報化社会の負の側面のデータを集めるという分類思考に陥ったなどで、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルのまとまりが少し乱れているが、仮説としてのKJ法原則にそう遠くない結論になっている。

### 2015年度4班

島A最終の表札：情報を利用するときは、その情報の信ぴょう性を自分で考え、判断し、信用できるメディアリテラシーを身につけることが大切である。

島B最終の表札：一度流れた情報は止めることができないため、いじめの問題や社会の混乱につながることもある。

島C最終の表札：インターネットの特徴は、相手が見えなくても、双方向に発信したり、いつでもどこでも言葉を適切に入力することで情報を調べたりできることである。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーを身につけよう ちっとまって！考えてから！！	1, 4, 5, 6, 7, 13, 14
B	流れる情報（止められない）	3, 10, 12
C	いつでも どこでも だれとでも	2, 8, 9, 11

4班の分析結果の評価：情報化社会の負の側面に関するデータのグループ編成によっては、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルがこのようになろう。仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっている。

### 2015年度5班

島A(B)最終の表札：私たちは受信した情報によって、人を傷つけたり、社会を混乱に招いたりしないように、冷静に判断し、それらの情報を正しく活用する知識を身につけるべきだ。

島C最終の表札：携帯電話、テレビ、インターネットによって、相手が見えなくても、双方向への発信や新しい情報を知ることができる。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーの必要性	4, 9, 13, 14
(B)	(情報に惑わされるな) (情報発信は慎重に)	5, 6, 7, 3, 10, 12
C	メディアの現状（双方向通信）	1, 2, 8, 11

5班の分析結果の評価：島Aと島(B)が統合されたために、全体が2つの島に分かれた。そこで、情報化社会の負の側面に関する最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルの抽象化ができず少々ものたりない表現になってしまった。仮説としてのKJ法原則に近い結論とは言えない。

### 2015年度6班

島A最終の表札：私たちはメディアリテラシーを身につけ、傷つく人がでないような、安心して豊かに暮らせる社会をめざす。

島B最終の表札：すべての情報には、情報被害を起こしたり、社会を混乱させたりするほどの強い影響力がある。

島C最終の表札：私たちはインターネットの使い方を知ること、いつでもどこでも情報を得られ、誰とでもよくコミュニケーションを図ることができる。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	身につけよう!! 情報活用能力	4, 13, 14
B	情報が及ぼす悪影響—情報被害と混乱	1, 3, 5, 6, 7, 10, 12
C	情報でつながる世界（ユビキタス）	2, 8, 9, 11



6班の分析結果の評価：島Bに情報化社会の負の側面のデータを集めるという分類思考に陥ったことなどにより、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルのまとまりが少し偏ったが、仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっている。

### 2015年度7班

島A最終の表札：インターネットで情報を利用するとき、上手に情報を選択し、発信元や内容を見分け、冷静に判断するメディアリテラシーを身につける必要がある。

島B最終の表札：私たちは買い物をするとき、広告につられて冷静な判断を送ることがある。

島B最終の表札：情報を受信するときは、社会が混乱しないように、また受け手が困らないように、どのように伝えるか、考えることが大切である。

島C最終の表札：我々はテレビコマーシャルやウェブサイトを通して情報を得たり、携帯電話やネットを使って交流したり、情報を受信することができる。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーの必要性	4, 9, 14
B'	メディアの冷静な情報操作	5, 6, 7
B'	情報の発信は慎重に	3, 10, 12, 13
C	双方向になった情報化社会	1, 2, 8, 11

7班の分析結果の評価：島Bが2つの島に分かれてB'が2つになったため、全体が4つの島になった。そのために少しまとまりに欠けているが、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルは、仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっている。

### 2015年度8班

島A最終の表札：情報を利用するときには、内容を見分けて情報を選び出し、メディアリテラシーを身につける必要がある。

島B最終の表札：情報によって有益な情報を得たり、被害を受けたり、社会が混乱したりする。

島B最終の表札：インターネットは顔が見えず、流れた情報は止めることができないので、いじめが起きやすいため、人が傷つかないようにする必要がある。

島C最終の表札：我々はインターネットやテレビで、いつでもどこでも双方向に情報のやりとりができる。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーの必要性	4, 9, 14
B'	情報の利便性と被害	1, 3, 5, 6, 7
B'	ネット社会の危険性	10, 11, 12, 13
C	情報化で双方向にいつでもどこでもできる	2, 8

8班の分析結果の評価：島Bが2つの島に分かれてB'2つになったため、全体が4つの島になった。そのために表面的で少しまとまりに欠けているが、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルは、仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっている。

## 2016年度1班

島A最終の表札：私たちは調べるときに入力する言葉に注意したり、情報の内容の発信元を見分けたりするなど、必要な情報を自分で冷静に判断して選択できるようになることが大切だ。

島B最終の表札：情報を発信するときに、いじめなどで傷つく人がいたり、選んだ情報によってかえって高い買い物をしてしまったり、報道被害を受けたりするのでよく考えなくてはいけない。

島B'最終の表札：一度インターネットを通して流れてしまった情報は、止めることができない。

島C最終の表札：情報機器の発達により、相手が見えなくても交流できるようになり、たくさんの情報を得ることで、私たちの生活に影響が及んでいる。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	判断・選択・活用（メディアリテラシー）	4, 9, 14
B	我々は情報を利用するときよく考える	3, 7, 10, 13
B'	止められない 止まらない	12
C	我々は情報に影響を受けている	1, 2, 5, 6, 8, 11

1班の分析結果の評価：島Bが2つの島に分かれたため、少しまとまりに欠けた。最終の表札は、長々とした説明文となっているが、元ラベルの文言の足し算になっており、「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルが、適切な抽象化に至っていないことから、仮説としてのKJ法原則に近い結論とは言えない。

## 2016年度2班

島A最終の表札：私たちが情報を活用するときは、気づくことがないために、発信元や内容を見分け、判断するメディアリテラシーを身につけることが必要です。

島B最終の表札：コマーシャル、広告、インターネットを通して、商品の名前などの情報を止めることなく受け取ってしまうために、商品の選択の間違えやいじめという形で被害を被る人がいる。

島C最終の表札：インターネットは、調べ学習や目に見えない相手との双方向の交流ができ、便利なメディアですが、言葉の選択が大切です。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーで身を守れ	1, 4, 8, 13, 14
B	情報の丸受けは被害を生む	3, 5, 6, 7, 10, 12
C	インターネットの多面性（双方向の利便性）	2, 9, 11

2班の分析結果の評価：島Bの最終の表札の抽象化ができていない。また、ICT機能の特徴に関するデータが分散したために、島Cの最終の表札が薄い結論になった。したがって、「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルの表現も表面的なものになってしまい、全体として仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっていない。

### 2016年度3班

島A最終の表札：情報を発信したり利用したり、また調べ学習をしたりするときには、よく考えて言葉を選ぶために、メディアリテラシーを身につけることが大切です。

島B最終の表札：情報は便利な反面、うまく選択できなかつたり、匿名性での交流やいじめ被害や報道被害、社会混乱が起こったりすることがある。

島C最終の表札：テレビ、インターネット、携帯電話をつなぐことによって、情報を調べたり双方向に発信したりすることができるようになった。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーを身につけよう	4, 9, 13, 14
B	情報社会の難しさ・危険性に惑わされない	1, 3, 5, 6, 7, 10, 11, 12
C	いつでもどこでも誰とでも（ICT機能）	2, 8

3班の分析結果の評価：島Bに情報化社会の負の側面のデータを集めるという分類思考に陥った感があり、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルのまとまりが表面的になっている。しかし、仮説としてのKJ法原則に遠くない結論になっている。

### 2016年度4班

島A最終の表札：私たちが情報を活用するときは、メディアリテラシーを身につけ、インターネットを使うとき、どのような言葉を入力するかを考えたり、冷静に判断をすることが大切。

島B最終の表札：私たちは情報をメディアを通して収集し、商品を選べる半面、高い買い物をすることがある。

島C最終の表札：私たちはテレビやインターネットで、相手が見えなくても双方向にやりとりができるようになった結果、報道被害や社会混乱、いじめ、情報流出などの問題をもたらされるようになった。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	メディアリテラシーの習得	4, 9, 14
B'	情報を取捨選択する力	1, 5, 6, 7, 8
B	情報化社会の危険性	3, 10, 12, 13
(C)		2, 11

4班の分析結果の評価：情報化社会の負の側面に関するデータのグループ編成が島Bと島Cに分散され、最終の表札の表現が結論として抽象化に至らず要約に欠ける。「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルにおいて、島Cの「メディアの双方向機能等」要素が欠落してしまった。全体として表面的なものになっている。仮説としてのKJ法原則に沿った結論とはいえない。

### 2016年度5班

島A最終の表札：インターネットを通して流れてしまった情報は、止めることができず、いじめなどで傷つく人や情報被害による社会混乱をまねく恐れがあるので、情報の発信者はよくよく考えなくてはいけない。また、情報を受ける側は、インターネットで検索する言葉をよく考えたり、情報の発信元や内容を見分け、冷静に判断ができるように、情報を自分で選び、メディアリテラシーを身につける必要がある。

島C最終の表札：私たちはテレビ、携帯電話、インターネット等から情報を受け取ったり、発信したりできるようになったが、情報をうまく活用できない時がある。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	心がけは みんな次第！	3, 4, 9, 14
(B)		10, 12, 13
(B)	情報の使い方は あなた次第！	5, 6, 7
C		1, 2, 8, 11

5班の分析結果の評価：情報化社会の負の側面に関するデータのグループ編成が島AとCに入り乱れ、全体が2つの島になったため、少しまとまりに欠ける。島Aの最終の表札が2センテンスになったことからわかるように、要点を得た表現に至らなかった。「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルも抽象化の度合いが低く不明確なものになってしまった。したがって、仮説としてのKJ法原則に沿った結論とはいえない。

### 2016年度6班

島A最終の表札：情報を発信するときも受け取るときも、メディアリテラシーを身につけ、上手に情報を活用していくことが大切です。

島B最終の表札：情報化が進むにつれてマスメディアによる商品情報の誘導やネットいじめ、報道被害などの問題が増えてきています。

島C最終の表札：メディアが、技術の向上により、交流の幅が広がるなど便利になったが、発信した情報を止めることができない。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	求められるメディアリテラシー 情報を活かす私たち	4, 9, 13, 14
B	情報に翻弄される私たち	3, 5, 6, 7, 10
C	広がるメディア	1, 2, 8, 11, 12

6班の分析結果の評価：情報化社会の負の側面に関するデータのグループ編成が少々入り乱れ、各島に分散されたことにより、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルが少し揺らいでいて抽象化の程度が少し低くなった。しかし、全体として仮説のKJ法原則に沿った結論にはなっている。

### 2016年度7班

島A最終の表札：私たちは情報に関する技能と判断力を身に付け、社会への影響力を被ることがないように気をつけて活用する。

島C最終の表札：携帯電話、インターネット、CMの情報は常に発信され、それを収集したり、交流したりすることにより、コミュニケーションツールとなり、私たちに大きな影響を与える。

島	「一行見出し」・最終的な「志」のベクトル	統合されたデータ No.
A	情報リテラシーを身につけよう	4, 9, 14
(B)		3, 7, 10, 12, 13
(B)		1, 5, 6
C	双方向になった情報化社会	2, 8, 11

7班の分析結果の評価：トップダウンの分類思考に陥ったためか、情報化社会の負の側面のデータ内容が欠落した。したがって、最終の表札及び「一行見出し」・最終的な「志」のベクトルの抽象化に至らず、仮説としてのKJ法原則に沿った結論になったとはいえない。

### Ⅲ-3 事後アンケート結果

受講生全員が、KJ法は問題解決の手法として有効であるとし、ほとんどの者が、今後の教育実践や生活にこれを用いて研鑽を積みたい、と回答した。これはKJ法初心者であるとはいえ、その習得を希望して講習を受けたことから当然であるといえるかも知れない。(具体的なアンケート結果については、紙幅の都合で割愛する。)

以上、15シートのKJ法図解は、上記のように厳しく評価した結果、9シートが仮説としてのKJ法原則に沿った結論になっており、6シートが全体として、KJ法原則に沿った結論に至らなかった。

しかし、対象者全員がKJ法初心者であることを考慮すると、全体の60%が仮説のKJ法



原則に沿った結論になったことから、それらは近似的に妥当であると認めることができよう。したがって、この限りにおいて質的研究法としてのKJ法の科学性を客観的に少なからず論証できたと考える。<sup>33</sup>

#### IV 考察：

本質追求をも含めた広い意味の状況把握とは、W図解における状況把握から本質追求のプロセスである、と川喜田はいう。そこで最も大切なことは、「データをして語らしめる」こと。つまり、「この考えや理論を当てはめれば、このように解釈でき、まとまる」といった、観念的理論や既成概念でデータをまとめること、また希望的観測で無理にまとめることも禁物であるとした。換言すれば「評価ぬきであるからこそ、明鏡止水の境地で状況が正しく見えてくる」。したがって、状況把握の段階までは「おのれを空しくして」評価を一切排除し、それを踏まえた段階で姿勢を一転し「おのれらしく評価する」ことが、非常に大切である。<sup>34</sup>

したがって、実験室的自然では、①目標として、法則追求である。普遍妥当性を追求するが、完全な反証は無理な場合もあるので、統計や誤差の概念を用いる。②定量的データに固執する。③形式論理的に厳密と思われる論理演算による分析が重視される。<sup>35</sup>しかし、物事を法則追求的に捉えるか、個性把握的に捉えるかは、全く対等な捉え方の二つの道である。一方だけが科学的で、他方が科学的以外のものとされる根拠は何もない。しかし、法則追求のみを科学的と盲信し、遂には独自ということの意味がわからなくなって、それを普遍に対する単なる特殊と混同している。<sup>36</sup>

このように厳しく研究方針を規定しているKJ法なので、その結論「相関関係の配置図」構造の近似性に関し、上記結論のように妥当な信憑性が確認されたが、これはあくまでもKJ法初心者に対する評価であって、KJ法に親しんだ者による図解であるならば、より近似した構造になったと考える。また、グループKJ法のため、個人によるデータの統合とは異なり、協働学習による思考深化の効果があったと考えられる。<sup>37</sup>

適切な抽象化がなされたならば、「仮説」に示したように、島A最終の表札には、「コマース的に洗脳」「情報被害」や「主体的判断」という文言が、島B最終の表札には、「個人情報発信」というような文言が入るはずである。また、島Aの「一行見出し」には、「主体的メディアリテラシーの体得」、島Bには「ICT機能の特徴（ユビキタス）」などの上位カテゴリーへの抽象化がなされたことであろう。

構造構成主義に基づいたKJ法の評価基準として、構造化に至る軌跡の開示を、①データ収集段階（調査手続きの透明化）と②分析段階（分析プロセスの透明化）に分け、また③結果の提示段階として、図解化と叙述化において構造を明示しているか、に分けて評価する方法が提示されている。②分析段階においては、1) グループ編成はデータをして語らしめているか、2) 表札づくりのプロセスが可能な限り透明化されているか、3) 図解はデータに根ざしているか、である。<sup>38</sup>

そこで今回の研究対象に関して、さらにこの1) と3) とについて、詳しく分析する必要がある。このような抽象化に至るプロセスの考察については、紙幅の都合上、小論においては記述できなかった。また、元データ数が14と少なかったことから、特にKJ法初心者

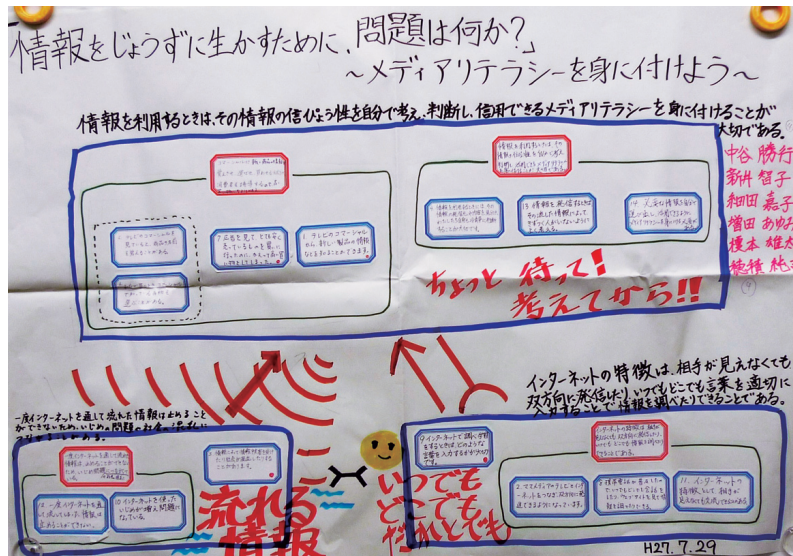
にとっては、上位カテゴリーへの抽象化が難しかったことも考えられる。今後の課題として、30項目近い元ラベルによるKJ法図解の結論「相関関係の配置図」構造の分析を考察し、これらの点を補う必要がある。

【註】

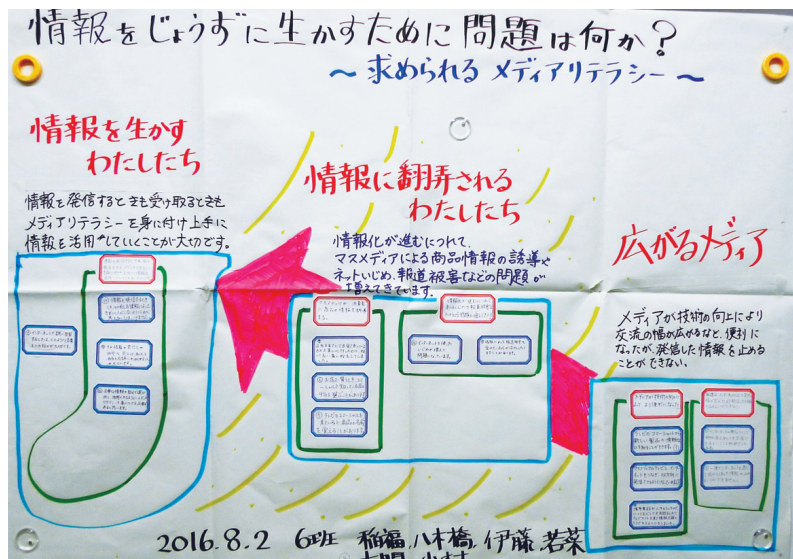
- 1 池田清彦 1990 構造主義科学論の冒険 毎日新聞社（講談社現代新書1998）pp.102-14  
竹田青嗣 2004 現象学は〈思考の原理〉である 筑摩書房 pp.62-87  
西條剛央 2005 構造構成主義とは何か ― 次世代人間科学の原理北大路 p.125, 157, 199
- 2 秋田喜代美・藤江康彦（編）はじめての質的研究法 教育・学習編 2007東京図書 p.9
- 3 川喜田二郎 1986 KJ法 ― 混沌をして語らしめる（川喜田二郎著作集第5巻）中央公論社 p.475
- 4 S.B.メリアム 2004 堀薫夫・久保真人・成島美弥（訳）質的調査法入門 ― 教育における調査法とケース・スタディー 叢書：現代社会のフロンティア3 ミネルヴァ書房 p.5.8  
ウヴェ・フリック 2002 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）質的研究入門 ― 〈人間の科学〉のための方法論 春秋社 p.36
- 5 舟島なをみ・杉森みどり 1997 看護教育学における質的帰納的研究方法論開発研究のための理論的枠組みの構築 千葉看護学会誌 vol.3 No1. pp.8-14  
住政二郎 2010 質的研究の科学性に関する一考察 より良い外国語教育研究のための方法 外国語教育メディア学会関西支部メソロジー研究部会2010年度報告論集 pp.30-44  
田中博見 2010 KJ法入門：質的データ分析法としてKJ法を行う前に 外国語教育メディア学会関西支部メソロジー研究部会2010年度報告論集 pp.17-29  
田中博見 2011 質的研究のための評価基準：KJ法を用いた動機づけ研究での例 外国語教育メディア学会関西支部メソロジー研究部会2011年度報告論集 pp.106-120  
山浦晴男 2012 質的統合法入門 ― 考え方と手順 医学書院  
拙著 2015 教育学 ― 人間科学からの展望 明星大学出版部 第10章
- 6 拙論 2012 KJ法学習による思考深化に関する研究 ― 大学初年次教育への導入に関連して 明星大学教育センター紀要 第2号 pp.39-63
- 7 Jerome S. Bruner 1965 *The Process of Education*. Harvard University press pp.17.（鈴木祥蔵佐藤三郎訳『教育の過程』1972 pp.21-23）
- 8 西條剛央 2005 構造構成主義とは何か ― 次世代人間科学の原理北大路 p.199
- 9 同前 p.190
- 10 S. B. メリアム 2004 前掲 p.8-9
- 11 川喜田二郎 1986 前掲 p.460
- 12 山浦晴男 2012 前掲 p.12-3
- 13 実際、KJ法が普及する70年代から90年代にかけて、KJ法学会や交流会でお会いしたメンバーは、経済界の人たちがほとんどで、医療（看護学）関係者が少数混じっていた程度であった。
- 14 川喜田二郎 1986 前掲 p.472
- 15 同前 p.550-1
- 16 竹田青嗣 2004 前掲 p.70、西條剛央 2005前掲 p.49-50
- 17 西條剛央 同前 p.53
- 18 川喜田二郎 1986 前掲 p.188
- 19 池田清彦 1990 前掲 pp.274
- 20 西條剛央 2005前掲 p.123
- 21 川喜田二郎 1986 前掲 p.476
- 22 西條剛央 2005 前掲 p.190-1
- 23 川喜田二郎 1986 前掲 p.153-4
- 24 同前 p.467
- 25 この空間配置図構造として、キャリア40年余の筆者が妥当とした結論（構造）を示した。
- 26 「的確なグループ編成を積み重ねると、ますます物事の核心に喰いこんでゆく。こういうのを抽象化と呼びたいのである。だから、『抽象的』と『観念的』とは非常にちがう。」川喜田二郎 1986 同前 p.153

- 27 「単元：4情報化した社会とわたしたちの生活 — 小単元3情報を生かすわたしたち」『新しい社会5年下』(平成23年度版東京書籍) pp.72-9の文章から、その小単元の学習問題である「わたしたちは、どのようにすれば情報をじょうずに生かすことができるでしょうか」の要点文と考えられるワンセンテンスを事前にピックアップしておいた。
- 28 川喜田二郎 1983 前掲 p.163
- 29 同前 pp.54-8
- 30 同前 pp.123-55。また、川喜田二郎 1967 発想法 中央公論社(中公新書)、川喜田二郎 1970 続・発想法 中央公論社(中公新書)、川喜田二郎 1992 野外科学の思想と方法(川喜田二郎著作集第3巻)中央公論社など参照。
- 31 川喜田二郎 1983 前掲 pp.134-7
- 32 下記は、それらサンプルのKJ法図解の例示。

2015年度4班のKJ法図解



2016年度6班のKJ法図解



- 33 なお、これらKJ法図解を用いて各班が次々に発表した後で、受講者が最初に抱いた素朴な質問 — 「同じデータをKJ法の原則に基づいてやれば、みんな同じような結論の図解になりますか？」につき、実感として同じような出来栄の結果になり、やはり原則に則って行えば、同じようなものになる」と、異口同音に述べていたことが印象的であった。
- 34 川喜田二郎 1986 前掲 p.78
- 35 同前 p.473
- 36 同前 p.474
- 37 拙論 2013 KJ法を用いた学習による思考深化の研究 — グループKJ法による協働学習の効果に関連して 明星大学教育センター紀要 第3号 pp.63-92
- 38 田中博晃 2011 前掲 pp.110-11